



シモマッチの 校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男 盛岡中央高校附属中学校副校長

第30回

子どもの主体化と学校のミッション

□学校のミッションとは

私は講演会などで「学校のミッションとは何か」というテーマで話をすることがあります。その際、「学校、病院、刑務所からイメージされる共通点は何だろう」という問いから出発し、ディスカッションしてもらいます。

これまでいろいろな意見をいただきました。例えば「見守られる場」だとか、「自浄能力と自立を促す場」だとか。「他者の力をかりて自分を鍛え直す場」と述べた人もおりました。ネガティブな意見としては、「内向きな組織で、外部とのつながりが薄い」「悪い習慣を強制する」「規則や訓練によって行動の規範を内面から身体化する場」などという言葉が出てきました。

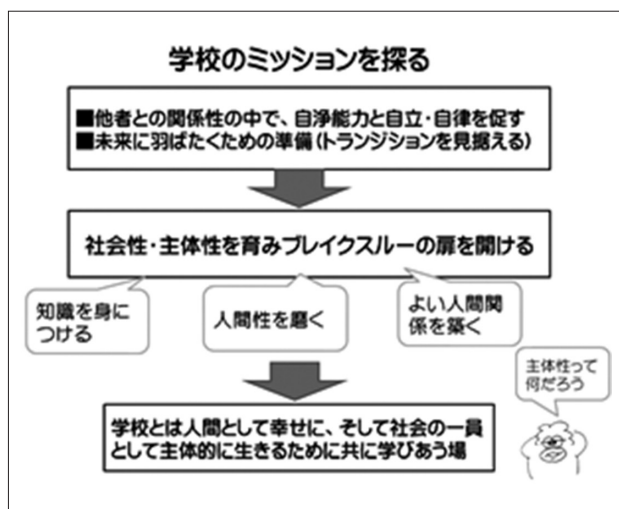
これらを整理してみると、大きく二つに分かれるように思います。一つは「自分を変える場」であるということです。他者の力をかりて自分を鍛え直すとか、自らの欠乏に気づいて行動を変えろということですね。ここには他者視点、他者性というものが働いているのですが、でも結局はそこから自らが気づいて自分がかみ取っていくという段階を踏んでいます。つまり最終的には自分で課題を見つけて、自立していくということですね。

もう一つは、病院も刑務所も学校もいつかはその外側に出るということです。いつまでも病院にいるのが目的ではなくて、退院することが目的。刑務所もいつか「シャバ」に出るのが目的です。学校も必ず卒業して、就職にランジションする。つまり、どれもが準備の場であると。「飛ぶ前に届む」という言葉がありますが、つまり学校とは、明るい未来に飛び立つ準備、社会に出るための訓練を組織的に行う場だということもできます。

□ポイントは「主体性」

そのような結果を踏まえて、学校のミッションを左の図のように標語的にまとめてみました。

学校とは、他者との関係性の中で、自浄能力と自立、自律を促す場であるとともに



に、未来に羽ばたくための準備をする場であるというまとめです。社会に出る準備とは社会性を身につけるといふこと、自立を促すこととは主体性を育てるといふことです。ちなみに、オランダの教育哲学者のガート・ビースタは、著書『よい教育とはなにか』の中で、学校の目的は主体化と社会化と資格化であると述べています。そして、学校は、資格化と社会化については、その目的を果たそうとしているけれども、

主体化の部分が弱いということを挙げています。

では、その主体性とは何だろうという話になります。現在の子どもたちは、果たして今、主体的でしょうか。岩手県のアクシヨンプランによる指標に、「自分にはよいところがあると思っている割合」というのがあって、現状値は65%となっています。お国柄なのかもしれませんが、日本人は自尊心が他の国に比べて低いと言われている、それは主体性がないこととつながっているとも言われています。

私は以前生徒に、インターネットを何に活用しているかと聞いたところ、出てきたのは、ゲームとか、YouTubeで動画を見る、音楽を聞くとかなんですね。これって全部「受動的」な活動ですよ。自分は座して、テクノロジーにやってもらおうという。とすれば、ICTは人を受動化し主体性を奪う装置なのではないかと、そんなことをちよつと考えてしまうわけです。

□ 子どもの主体性を奪っていないか

そういったものを見ると、確かに今の生徒は主体性がないよねって思ってしまうかもしれません。では、それは子どもの自己責任なのでしょうか。本当はそうではなくて、自己肯定感が低いのは、主体性を育む教育が行われていないことの裏返しではないのかと。もつと言うと、むしろ私たちは学校教育の中で、子どもたちがデフォルトとして有している主体性を奪ってきているのではないだろうか、こういったことも私は考えてしまうんです。

中学や高校で、新学年の最初の授業ではとても前向きだったのに、学年が上がるにつれ、だんだん目立つことをしなくなり、周囲に順応して、はみ出さなくなってしまうということがよく見られます。それは子どもの発達の問題なのでしょうか。私は、そうではなくて、本当はもとから備わっていた主体性を、学校教育が「社会性」とパートナーしてしまったのではないかと、つまり、管理しやすい集団になると引き換えに、主体性が失われてしまったのかもしれないとも思ってしまうのです。